

「わたしがお前を憐れんでやったように」

(マタイによる福音書 18:21-35)

今日の福音は、「兄弟を得る」ことについて語られた先週の福音と繋がっています。テーマは「赦す」ことです。「兄弟を赦す」ことは「兄弟を得ること」です。

ペトロは今日の福音の冒頭で主イエスに、「何回赦すべきか」と問うています。「赦すべき」回数を問うたペトロにとって、「赦し」とは自分の受けた損害を我慢することです。つまり、「何回赦せばよいですか」という問いは、「何回我慢すればいいですか」という問いなのです。もしも「赦し」が「我慢」することならば、それはいつか限界を迎え、我慢できなくなって兄弟を失うことになってしまいます。わたしたちクリスチャンはいつでも「兄弟を得るため」でなければなりません。わたしたちにとっての本当の損害とは、地位や名誉やお金が失われることではなく、兄弟が失われることです。だからこそ、主イエスは七の七十倍赦すこと、つまり無制限に赦すようにと教えます。

主イエスが問題にしているのは、回数ではなく、「赦さない心」です。「ここまでは赦してやる」という制限を設けているということは既に、赦すという心から離れ、「赦さない心」がその中心にあります。主イエスは「赦さない心」ではなく、「赦す心」こそ持たなければならないと言われていたのです。わたしたちは兄弟を得るため、神の家族としての平和な状態に戻るために、「赦す心」を持たなければなりません。しかし、その「赦す心」をわたしたちが持ち続けることは、どうしても限界があります。それゆえ、神はわたしたちの赦しの源となってくださるのです。今日のたとえ話で、とてつもない負債を抱えた家来を赦した主君のように、神がまずわたしたちのことを赦してくださるからこそ、わたしたちのなかに「赦す心」がもたらされます。「心から赦す」ことができる者とは、「深く憐れんで赦す」神に出会った者のことです。

主君が家来に言った言葉、「わたしがお前を憐れんでやったように、お前も仲間を憐れんでやるべきではなかったか」という言葉を忘れずにいましょう。わたしたちは皆、自分では負いきれない罪を神の憐れみによって赦されています。この憐れみに感謝しない者は、「不届きな家来」です。神がまずわたしたちを憐れみ、赦してくださっています。神の深い憐れみは主イエスの十字架によって示されました。ご自分の命をかけるほどに、わたしたちの命は尊いということ、主イエスは示してくださいました。御子の命を惜しまないほどに、神の憐れみは大きいのです。主がわたしたちをこれほどに赦し、憐れんでくださるからこそ、わたしたちはその神に倣い、互いに赦し合い、赦しと和解の関係を築くことができます。「深く憐れんで赦す」神に出会った者は、兄弟として互いに「心から赦す」者になるようにと招かれています。